

肥前名護屋城とその城下町について

申 裕媛

1. はじめに

本報告は肥前名護屋城とその城下町についてであるが、なぜこれをテーマにしたかという点、私は2002年から2004年まで、佐賀県の県立名護屋城博物館で国際交流員として二年間活動することができた。その関係で、名護屋城というところを初めて知って、それを韓国にも紹介したいということで研究テーマにした。

肥前名護屋城は、文禄慶長の役の出兵基地として作られたところである。韓国では、この文禄慶長の役を壬辰倭乱という。韓国と日本との交流史の中で、最も多く研究をされている時代でもあるが、韓国の研究を見てみると、戦争の始まりは、日本軍の釜山上陸からとなっている。だから、それ以前、日本ではどういう状況だったのか、日本で出兵基地となった名護屋城は、どんなところなのかということについては、あまり知られていない状況である。私自身も名護屋城博物館に配置されて初めて知ったことであり、名護屋は単純な軍事基地ではなく、名護屋城も近世を代表する城郭であったし、また、その周辺の城下町も、近世の特徴を持っている計画的に作られた都市だったということがわかった。そこで、今日はこの肥前名護屋城とその城下町について紹介したいと思う。

北部九州の東松浦半島は、古来から日本が大陸と交流する舞台であった。原始時代から見ると、日本最初の稲作の伝来地でもあったし、唐や新羅に国家使節団を送るのに、国家使節団が出発するところでもあった。宋との貿易においては、宋の船が頻繁に出入りする交易上の要地でもあった。中世の韓国と日本との交流史の中で、大事な事項は倭寇であるが、その倭寇の根拠地としても知られているところである。このような東松浦半島の最北端に位置しているのが肥前名護屋である。名護屋については、愛知県の名古屋と間違えることがあるが漢字が異なる。

豊臣秀吉は、この地に朝鮮侵略のための基地を築くことを命じたが、記録によると1591年の10月に工事が始まって、翌年の4月頃には城が完成された

といわれている。そして、この城は、秀吉が死んでから、日本の諸大名が朝鮮国から撤退する1598年まで、戦争の出兵基地、兵站基地として役割を果たしていた。文禄慶長の役以前は、肥前名護屋というところは小さな漁村だったが、お城ができたことによって、その姿を一新して全国からやってきた諸大名たちと、兵士や商人で賑わい、当時は大阪に次ぐ日本の第二の都市といわれるほどの大きな城下町として繁栄した。では、なぜ肥前名護屋に侵略の基地をつくったのか、その理由を考えてみたいと思う。

2. 肥前名護屋が侵略基地に選ばれた理由について

最初、秀吉は、博多に本営をおく考えだったと伝えられている。当時、博多は貿易港として有名なところで中国やヨーロッパの船が出入りするところでもあった。豪商がたくさんいて、大量の兵器や物資を集積するのに便利だということもあった。しかし本営は名護屋へと変更された。この変更の具体的な内容についての記録は残っていない。主に地理的、地形的な特徴を中心に選定したとされているが、まず朝鮮半島に最も近いところに位置していることが一番大事な理由とされている。名護屋は壱岐と対馬とつながって、釜山まで190キロメートルくらいしか離れていないところにある。そして名護屋はリアス式の地形で、記録によると、「千隻船隠し」と、船を1000隻くらい隠すことができると表現されるように、入り江が奥深くて、水深も深いので、大きい船でも容易にとめることができるところである。また名護屋湾の前には「加部島」という島があるが、その加部島が、外から名護屋湾を見ることができないという役割をして、天然の要塞のような地形を持っているところでもある。また昔から東松浦半島は、石や木がたくさんあるところで、良質の石材や木材の産地でもあった。さらに農民たちは、常に朝鮮半島への水先を案内する役割をすることができたので、肥前名護屋を侵略基地として選んだと推測されている。

秀吉の集結命令で160人を超える全国の大名たち

が、それぞれ数百数千人の兵士たちと一緒に、肥前名護屋城にやってきて、それぞれの陣を構えなければならぬ。博多の場合は、既に貿易港として形成されているところなので、新しくやってきた人たちが陣屋を構えるには、スペース的に無理があったのではないかという理由もある。

3. 肥前名護屋城の築城過程について

次に肥前名護屋城の築城過程についてみる。秀吉は1591年の8月、加藤清正、小西行長、黒田長政をはじめとする九州の全大名にむけて、都に作られていた聚楽第にほとんど遜色のないほどの大きな堀や、多くの建物をもっている宮殿とお城を名護屋に建築するように申し渡した。肥前名護屋城の着工は1591年の10月10日に始まったことが文書に残っている。肥後相良長毎（さがらながつね）に宛てた書簡（『黒田家譜』）などに残っているのだが、秀吉が大阪から名護屋城にやってくるのが1592年の4月25日であることから、遅くとも、それまでには城がある程度完成されていたということになる。しかし、名護屋城跡で採集した瓦に、1591年ではなくて、その前年の1590年にあたる天正18年5月と書いてあるものが出土している。これを見ると、やはり大きな城が六ヶ月くらいで完成されたということには無理があるし、工事の準備はその前年度から行なわれていた可能性もあると考える。ただ瓦は簡単に持ち運びができるので、他のところで使われていた瓦を名護屋城でリサイクルした可能性もあると考えている。一方、秀吉が入城した後も、工事は終わっていないということを示す史料もいくつか認められる。1592年の7月25日付で有浦大和守に宛てた浅野長政の書簡には、名護屋城の一角である弾正丸では、まだ築城の準備中だと書いてある。以上のことから、名護屋城の築城開始と完成の時期について、はっきり判定することは、今のところできないということになる。

現存する遺跡の範囲から、名護屋城の規模を推測してみると、南北が450メートル、東西は600メートルに達している。総面積は最低に見積もっても17万平方メートルを超えるということで、これは当時の大阪城の広さと比べて決して下らないということがわかる。高さも15メートルに及ぶ石垣で囲まれている大変壮麗な城であり、一番高いところには五層の天守閣を持っていた。その五層の天守閣をそなえ

た本丸からは、金箔の瓦が出土しているが、瓦まで金で塗ったということは、秀吉が自分の力を強調する、そういう意味として建てた建物だったということもわかる。名護屋城は、本丸を中心に渦巻状に二の丸、三の丸、東出丸、遊撃丸、弾正丸など、たくさんの曲輪を配置している。それぞれを経由しないと本丸まで至ることができないようになっていて、城の一番中心になる本丸を防衛する、そういう縄張りをしたということがいえる。

最近の発掘調査の進展によって、名護屋城が城として機能していた間、すなわち文禄慶長の役の間であるが、七年間に何度も改城されていることがわかってきた。特に本丸を囲んでいる石垣が、最初に作られた石垣を埋めて、その外側に一回り大きい石垣で囲んでいるのだが、そうすると本丸の周辺にある二の丸、三の丸の施設にも影響を及ぼすことになる。だから、ただの本丸の石垣の拡張ではなくて、城全体を修復することになる。その理由については、まだはっきりしていないが、秀吉は、朝鮮との戦争で勝って、中国に攻め入ることもできると思って、その出兵基地であった城をもっと大きくしようと思っていたのではないかと考えている。

当時、九州の大名たちは、軍役の3分の1を人夫として提供することを義務付けられていたのだが、文禄慶長の役当時の軍役の数は、8万2千人程度であるから、その3分の1は2万7千人になる。だから実際に、約3万人程度の人数によって城が作られたと考えられる。文禄慶長の役があった時期は、日本では築城技術が飛躍的に進歩していた時期であるが、天然的に険しい地形に依存して、臨時的な要塞にすぎなかった中世の城郭、主に山城であるが、そういう城郭が、戦国時代になると大規模化して、堀や土塁を駆使して、複雑な内部構造を持つようになる。しかし、このような城も、まだ土造り工法を主体とするもので、本格的な石垣を築いて、広大な平坦地を造成するほどの土木技術に達していなかった。こうした戦国時代の城郭の限界を打開したのが、織田信長の安土城であるが、それを引き継いだのが秀吉の伏見城、聚楽第、大阪城などであった。

今、人々が日本の城郭としてイメージする城は、この時代から始まるのだが、大阪にある大阪城は、秀吉の築いた城ではなく、江戸時代に入ってから新しくできあがったものであるから、この時代の城の石垣や城が今まで残っているものはないのである。

だから名護屋城の石垣が、近世的な石垣としては最も古いといえるのである。

当時これらの城に見られる天守閣や櫓や石垣などの築城法は、まだ地方には波及しておらず、東北地方とか九州地方では、出現していなかった。土木技術全般については近畿地方との格差が完全に解消されていない時期であった。しかし、名護屋城が建てられることによって、土木技術が日本全国に広がるようになったということもいえるのである。石垣の技術者として有名な穴太衆という鉄工の集団があるが、秀吉はその技術者を投入して、かれらの指導を受けながら石垣を積み上げることができたのである。この石垣は九州の諸大名の割普請で行われている。どの大名がどこの石垣を担当していたかということは、記録でははっきりしていないが、今残っている石垣をみても、部分部分によって積み方が異なることがわかる。これは大名たちが持っていた技術の差があらわれたとも言える。もう一つは、外側からよく見えるところや、本丸を中心にしたところには、石をきれいに割ってから積み上げてあるが、後ろ側や奥の方など、外側からあまり見えなところには、自然の石をそのまま使って積み上げていることもわかる。これらのことから秀吉が見栄をはるために城を活用していたということも、わかると思う。

4. 肥前名護屋城の城下町について

次に肥前名護屋城の城下町についてみる。朝鮮侵略にあたっては、北は蝦夷から南は薩摩までの大名たちがやってきて、全国から集まった大名が160人を超えている。それらの内、朝鮮国に渡っていく軍勢が約15万人、16万人位で、待機部隊となったのが10万人くらいと計算できる。名護屋にやってきた兵士たちがもっとも多かった時期には、30万人を超えたとも言われている。名護屋は大名たちと兵士や商人たちがやってきて30万人を超える人口となり、大変賑わった城下町であるが、ここには生活物資が集まってくる。「肥前名護屋城図屏風」を見ると、城や天守閣があり、多くの建物が存在することがわかる。この絵に描かれている城下町の道筋が、今現在の名護屋の道筋と大変似ていることから、「肥前名護屋城図屏風」は、信憑性のある史料として使われている。現在把握できている大名たちの陣跡は130箇所前後であるが、それらは、大体名護屋城を中心とする半径3キロメートル以内に広がっている。

戦いのための陣という点、仮設の駐屯施設に過ぎないと考えがちであるが、名護屋に構えられた陣というのは、能舞台や茶屋なども備えられていて、むしろ大名の屋敷ともいえるべき、居住性にすぐれた施設だった。戦乱が起きているのは朝鮮半島であるから、大名たちは、ここ名護屋では、優雅な生活を送っていたということがわかるのである。大名の陣屋は、石垣や堀をもっているところも多くあった。主要大名の陣跡の外側には、京都、大阪、堺、博多などの商人たちが店を連ねて、当時、望むものは全て手に入れることができたというほど繁栄していた。今でも、その町の名前がのこっているが、茜屋町、材木町、板屋町、兵庫町、刀町など、やはり兵站物資にかかわる名前が多いことが、当時、肥前名護屋の軍事都市としての性格を反映しているともいえる。

5. おわりに

秀吉が死んで、戦争が終息していく中で、徳川家康、前田利家などの五大老は、諸大名に朝鮮国から撤退することを命じたが、その時に、撤退先として名護屋でなく博多を指定している。それ以後、名護屋というところがどうなったのかというのは、記録が残っていない。そこに滞在していた大名、商人や町人などは、みな自分の国に帰ったのではないかと推測されている。その後、名護屋城は江戸幕府によって破壊されて、今は石垣だけが残っている。名護屋城は、城として機能できないように、石垣の角のほうが集散的に崩されているのである。上のほうからVの字に壊れているのだが、なぜ壊したのかということも、いくつか説があり、はっきりしていない。一つには、江戸幕府になって、朝鮮国との国交を正常化するため、平和のメッセージを伝えるためだったという説がある。朝鮮国から通信使が来たときに、出兵の基地だった城を江戸幕府は壊した、私たちは秀吉とは別の政権なのですよということをアピールするために壊したという説である。もう一つは、江戸時代に入って、九州で島原の乱という一揆が起こるのだが、一揆の勢力が城に入って籠城することを防ぐために城を壊したのだという説もある。さらに、もう一つ、一国一城制で唐津藩の唐津城があるから壊したという説もある。

今回の報告では、肥前名古屋城とその城下町を紹介するだけで終わるが、今後、論文にするときには、肥前名護屋城とその城下町がただの軍事基地ではな

く、日本の城と城下町が中世から近世にかわる時期に、中世の特徴と近世の特徴を両方持っている、そ

ういう独特な特徴を中心に書いていきたいと考えている。

◇ 質疑応答

フローア（お茶）：最後のところで、名護屋が中世と近世の二つの時代の特徴を持っていると仰ったんですが、発表の中では、どちらかというと、近世的な特徴を強調されたと思うんですけど、中世的な特徴というのは、具体的にどういうことでしょうか？

報告者：まず、石垣の積み方で、自然の石をそのまま使った部分があるということ。城下町の部分はここが基地として選ばれた理由の一つなんですけど、地形がちょっと険しい地形ですね。どちらかというと近世の城下町というのは、広々とした地形の上に、区画が整備されているんですね。ここはそういうところもあるし、地形によって、昔の町のように、不規則的なところもあります。近世の城下町は都市と農村部がはっきりわかれているんですけど、ここはちょっと混じっています。そういうところを論文では書いてみたいと思っています。また大名の陣屋と商人たちの店とが、はっきりしていないところがあります。主要大名の陣屋とそれ以外の大名たちの居住地が、ちょっと混じっているところもありますので、その部分を中心にやりたいとおもいます。

フローア（お茶）：城下町という都市が形成されているという時代的画期をどの辺に考えていますか？中世という設定は、漠然として広いので、もう少し絞ってくれると。

報告者：戦国時代初期を城下町の形成時期と日本でみていますので、それと思っています。

フローア（お茶）：もうちょっと具体的にいうと、例えば中世の城下町として、あなたが考えている町は具体的にどこで、近世の城下町の特徴を強く持っている城下町はどこか、二つ、それぞれ挙げてもらえますか。

報告者：山口が。戦国時代から近世に入らる中で、有名な城下町としていわれているんですけど、まず山口の城下

町を作るときも、大名、大内氏とかね、商人たちが住めるように、いろんな政策をおこなうんですね。そこから計画都市として城下町が始まるという風に見ています。ですが、初期の段階の城下町ですので、ちょっと近世の城下町と比べて、町並みとかができていないところがあるんですね。近世の代表とする大阪とか江戸の特徴を取り上げて、比べられるようにしたいなと考えています。

司会：そのイメージで先生のご意見がございましたら、教えてください。勉強になると思うんですけど。

フローア（お茶）：全然わからないんですけどね。中世と近世と仰ったんで、そのそれぞれの特徴をちゃんと押さえた上で、名護屋でそれぞれの特徴をどのように具体的に見えるかというのを、少し整理していくというのではないかと思います。

フローア（お茶）：名護屋の城下町に材木町とか茶屋町といった、兵站物資にかかわる町名があって、それが一般の城下町とは違って、前線基地の特徴をあらわしているということなんですけど、こういう武器とかを作る職人の名前をもった町と言うのは、むしろ近世の城下町では一般的だと思うんですね。鍛冶屋町とか。ですから、ここは一般城下町と違って、と捉えるよりは、むしろ近世的な城下町の特徴を初期の段階で備えていたと捉えたほうが良いと思います。

報告者：近世の他の時代に形成された城下町の名前は、武器の名前だけじゃなくて、他の名前をもっている職業の町が多いんですが、ここはそれ以外はあまりないということがある。

フローア（お茶）：豆腐町とかがない？

報告者：そうです。だからこういう風にしたんですけど。ごめんなさい、ありがとうございます。